



京都タロット宙のメサージユ®

別冊！京タロ指南書

めくるめくシンボリズムの世界



#03 警告の剣の拾

岩倉ミケ

奇想庵



目次

聖戦から降参へ	
警告の予兆 一、自分を偽り続けると出現する徴（しるし）	3
警告の予兆 二、聖戦のはじまり	5
パワハラから聖戦へ	7

聖戦から降参へ

警告の予兆 一、自分を偽り続けると出現する徴（しるし）

ある時、ルブ・エル・ヒズブと呼ばれるアラビア文字が妙に気になり、調べていたら「ジハード」という言葉に行き当たりました。現在では日本でも、ジハードとは「聖戦」という意味のイスラム圏の言葉だと知っている人は多いでしょう。

聖戦という言葉には、正義のための戦いというニュアンスがあるので、多少美しく聞こえがちですね。しかし、実のところ「正しさへの強烈なこだわり」ゆえの、戦争を美化した言葉に過ぎないのではないかと私には感じられます。

たまたま《剣の拾》について考えていた時と重なり、ジハードという言葉が心にひっかかったのかもしれませんが。

さて、京都タロットの《剣の拾^{じゅう}》は、全カード七十八枚中、最も厳しい状況を表すカードだと私は感じています。イドやオロチ、アダシノなどの剣の宮の大アルカナよりも、状況の辛苦を告げるのは、このカードの場合が多いように思えます。

京都タロットを使い慣れている私でも、《剣の拾》が見えるとドキッとしてしまいます。しかし「絶対肯定」が絶対の京都タロット。辛いことがあったからといって、ただ耐え忍べなどとは決して言いません。いかなるカードでも、体を通して、変容転化させる縁^{よすが}とします。

指南書にも同様のことを書いたように、《剣の拾》とは、いわゆる善悪の悪ではありません。というより、悪（と思っているもの）を見直せという最後通達のようなものだと理解しています。

要するに、悪とされることが単純に悪いのではなく、なぜ、その戦いが起こり、「悪」「不快」「嫌悪」とあなたが感じる状況に至ったかに目を向けさせてくれます。

戦いに至る状況は、大きく二つのパターンに分けられます。ざっくりと、戦いをしかける側と、戦いを挑まれた側。イマドキの言葉でいえば「パワハラをする側」「パワハラ

をされる側」と考えるとわかりやすいでしょう。どちら側にいたとしても、不快さや嫌悪感となって表現されます。

まずは、「される側」の方からの不快を見てみましょう。

多くの場合、その状況は、あなたがその前段階で自分の心を偽った結果として現れます。

ほんとうは嫌だ。辛い。でも表現できない——この心の辛さが極限に達する時、《剣の拾》的状況に陥ります。

大原則として、京都タロットは、まずは自らの本音に気づくためのカード。

だから「ほんとうは嫌だ」と心が訴えていることを、自ら騙し騙しやっていないかと問いかけてくれます。当初は、要するに「我慢」ができたことでも、本音を偽って行うことは、遅かれ早かれ限界がくるからです。

まずは、心の限界という意味で、《剣の拾》が現れます。

このあとは、限界がくるまで放置して、自ら爆発する「戦い」のパターンと、限界から目を背けたことによる、恐れていたことが表面化する「戦い」のパターンが見られます。

いずれにしても、自分を偽った結果として大戦状態に陥っているという象徴が《剣の拾》なのです。

次は、「パワハラをする側」の憤りを深く見てみます。

警告の予兆 二、聖戦のはじまり

「パワハラをする側」は、先述した「ジハード」と呼ばれる戦いを挑む立場と言い換えてもいいでしょう。《剣の拾》は、どちらかと言えば、この「する側」のパターンの場合に現れやすいように感じます。(当然、時と場合によりますが)

しかしながら興味深いことは、パワハラをする側の人は、それがパワハラであるという自覚が希薄です。むしろ「善いこと」をしていると思っている場合すらあります。ジハードのジハードたる所以ゆえんですね。ニュースやワイドショーから、思い当たる人も多いでしょう。

ジハード、聖戦とは、正しさを求める人の熱情の凄まじさの表現として、人は他者を殺すだけでなく、自ら命を絶っても正義を証明しようとする心の働きがあると思えます。

要するに、死んでまで勝とうとするマウンティングの姿勢に警鐘を鳴らしているのが《剣の拾》なのですね。

実際に多くの戦争は、そういう大義でもって挑まれます。(内情は、お金儲けの下心だとも言われていますが)。

この場合の《剣の拾》は、実際の戦争状態というより、心に巣食う、正しさへの異常な執着への警告の印として引かれるカードと見ることができます。

こんなふうに言うと、《剣の拾》が出てきた時に、自分は間違っているかもしれないと疑えという解説をしてしまうかもしれませんが、それは安直です。

この《剣の拾》は、正しさを求めすぎて、膠着状態を招いていることに気づかせてくれます。つまり、正しいと信じたことを、自分(あるいは他者)に押し付けていないか?ということ。

正しいと信じた事物や事象自体の善し悪しを問うてるわけではありません。その正しさにこだわり過ぎて、そのやり方やあり方を無理強いしようとする心の働きに気づくことが、その時のあなたに求められることなのです。

《剣の拾》の出現は、正しさという善は、ぐるりと悪に転じていることに気づくべき
ときを知らせる——と解きます。

次の項では、私自身の日常の経験から、警告の《剣の拾》を具体的に洞察してみよう
と思います。

パワハラから聖戦へ

小学生の長男鯛（仮名）のことで、彼の休みの日の使い方について、少しストレスを覚えていたことがありました。

彼が、宿題に手を付けるのは、決まって日曜日の夕方以降。私は、金曜日かあるいは土曜日の間に終えてしまえば、残りの時間が気楽に過ごせるのに……という思いがあって、「さっさとしとき」と毎週末になると長男をせつついていました。しかし、いつも鯛坊は生返事で、結局は『笑点』が始まる頃になって、宿題を慌ててやっているという状態でした。

ここで白状すると、私は彼に口うるさく命令し、無理に机に座らせたこともあります。ただ、そんな時、彼は虚ろにぼんやりするばかりで、かえって進まないということがわかり、自発的にやりはじめないと意味がないなあと感じていたところだったのです。

そんな時、たろうさんは《剣の拾》を、私の手に取らせました。

本当のことを言えば、《剣の拾》を引き当てるような現実を抱えているつもりはなかったのですが、なんだろう？ と自問するところから始めました。《剣の拾》が出なければ、この件で立ち止まることはなかっように思います。まさにパワハラをする側は、していることに気づかないとは、このことですね。

ただ《剣の拾》は、何らかの警告を意味していると経験上わかっていたので、現状を見回してみて、ストレスを感じていた長男のことに思い当たりました。

土日の間ずっと（早く済ませてしまえばええのに）と考え続けているのが嫌なのは、母親である私の感覚であって、息子が同じように感じているわけではありません。当然ですね。

こんなあたりまえのことを、私はその時まで無視し続け、なんなら長男の方も、本当は早く宿題を終わりたいのに、思うように進めないのだろうと、疑いもなく思い込んでいたのです。

考えてみれば、私自身だって現役のライター時代は、締め切りギリギリに手を付けることもしょっちゅうでした。それは、追い込みをかける方がパフォーマンスが上がる場

合がよくあったので、ギリギリまでエンジンが掛からないことがわかっていたからです。(恥ずかしながら現在に至っては、ノート製作のご依頼から、半年以上もお待たせしてしまっています。……息子のことを叱っている場合か！ ですね)。

自分自身でも身に覚えがあるくせに、なぜか子供は別で、早く宿題を終わらせてしまおうと躍起になっていたのでしょうか？

はっきり言って、これは「そうあるべし」という親の思い込みです。早く終わるのが最善、正しいと言う囚われた考え方がありました。

長男には長男に合ったペースやタイミングがあるはずなのに、いわゆる常識（と私が決めつけていたこと）を、彼の本音より上位に置いてしまっていたのです。

ちょっと言い訳をさせていただくと、すでに成人している長女の小学生時代は、金曜日の夜には宿題をし終えていたものだったし、さらに余力すらありました。そのため、大人になるまで、勉学の面で彼女に注意することなど、ほとんどなかったこともあり、このことは私の中で、ある種の成功体験となっていて、私の思い込みを強くしてしまっていたようにも思えます。

だから、娘の小学生時代を基準に考えて、明らかに段取りの劣る長男に苛立ちが出てきてしまっていたのですね。「どうすれば、長男が休みの日に早く宿題に手をつけられるか？」というのが、母としての問いであり工夫のしどころと考えていたのです。書いてしまうと、けっこう傲慢な教育の仕方だとわかるのですが。

さて、ここにきてようやく、自身の正しさに対する執着が露わになり、本質の問いかけができるようになります。

そもそも、なぜ、早く、宿題に手をつけねばならんのだ？

本人が、やろうとするペースで、それでいいのではないか？

いや、本人のやろうとするペースこそ、いいのではないか？

長男にとって、本当に良いペースなど、私にわかるわけがない。

私は、なにもわかっていなかったのだ。

私はついに、自分の正しさの押し付けに気づくことができたのです。

これは、子供の宿題という、非常にささやかな問題ではありますが。でも、ここで長男の感覚やペースを、親が無視して阻害することの方が、のちのち、もっと大きな問題として立ちはだかったのかもしれないと感じるのです。《剣の拾》は、母としての在り方を振り返るきっかけを与えてくれたように思います。

かくして私は翌週より、子供のペースに完全に委ねることにして、口をつぐむことにしました。以来、「もう宿題終わったんか？」と声を掛けそうになることはありません。いえ、ふと言ってしまうこともあるのですが（汗）、その都度立ち止まることができます。私の声かけは、むしろ惰性であり、ただの口癖に成り下がっていることを痛感することになりました。

しばらくは気づくたびに、止まり、手放すという一連の思考の流れをコントロールする意思は必要でしたが、ここだけが踏ん張りどころです。

私が《剣の拾》を通じて、心から学んだことは、
正しさを押し付けない。（実際、正しいかなんてわかったことではない）
彼のペースを尊重する。（これがおそらく、本当の最善）

様子を見てみると、長男は、金曜日の放課後というのは、どうやら「勉強などやりたくない」と思っているようです。それが彼のペースなのでしょう。

土曜日になると、なんとなく手をつけてみて、そのまま乗ってくるとスピートアップして完了することもありましたが、乗らないとパタッとやめて、友人の家に行ったり、呼んだり遊びモードに入ります。

そして、そのまま日曜日になります。午前の方に気がついて手をつけることもあるにはありますが、そのまま遊ぶことも多いのです。しかし、夕方になると後がなくなるので、とにかかにも宿題をしています。

こちらから、どう見えていようが、これが彼のペースなのです。

さらに、私（母親）に何も注意されないのが、楽しそうに週末を過ごしているように見えます。

一度、「宿題を残して遊びまわるのって気にならへん？」と聞いたところ「うん。ならん」とひとこと。笑

宿題を後に残していたとしても、彼の中では整合性が取れているようで、土日の間にプラモデルを製作し、レゴを組み立て、本を読み、友達と公園にも行き、YOUTUBEを見て、ゲームもする……そして、もれなく宿題もしています。

そう、結果は同じ。

いえ、プラモデルをもう一個作ったり、本を読む量などは、むしろ、以前よりずっと増えているのですね。つまり、彼のペースの中で余力が生まれているのです。

ここまできて《剣の拾》の真の意味がわかってきます。

現状の膠着状態に気づき、それは多くの場合、正しさを押し付けであったと理解すること。

そして、ここで降参をすることなのです。

降参とは負けること。ここでは喜んで負けるというのが、絶対肯定の京都タロット的《剣の拾》の極意と言ってもいいでしょう。

おそらく、そこから、こだわりのない全く新しい地平が広がっていくにちがいありません。

こちらが「剣の拾」。双方の「正しさ」が交錯して大戦となる図。



『別冊！ 京タロ指南書 # 03 警告の剣の拾』 (完)

[# 04 に続きます] (←無料)

I 奇想庵（岩倉ミケ）

<『京都タロット宙のメッセージも最初の指南書』のご購入は、こちらのページから>
→



別冊！京タロ指南書 #03.警告の剣の拾

著 岩倉ミケ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
